The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	書名「奇談」素描 : 文事領域拡大の原動力
Author(s)	浜田, 泰彦
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 41-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書名「奇談」素描

――文事領域拡大の原動力――

浜田泰彦

はじめに、「師」としての古典文学とその評価

『仁勢物語』は『伊勢物語』のもじり作品であり、現在一般に通行した文学概念を適用するならば、パロディ作品である。したがって、『仁勢物語』は、古典文学史上の名著である『伊勢物語』という作品をいわば「師」として仰ぐことなしには存在しえない作品である。――以上は、今さら言を改めるまでもない事実であるが、この両作品の位置関係を前提にしておかなければ、正鵠な評価は与えられない。『日本古典文学大辞典』の『仁勢物語』の項目に尾上新太郎氏は、「本書のもじりは、あくまで駄洒落的諧謔をモチーフとしたもので、作品内容からは高い評価は望めない」[1]と記すが、『仁勢物語』は、むしろその執拗な「もじり」にこそ評価の軸を置くべき作品なのであって、独立した作品としての「高い評価」などそもそも「望」みなどしていない。そもそも『伊勢物語』の文言を操作し、通俗化する営為をこそ目的化した『仁勢物語』に、「作品内容」の「評価」を求めるのは、不当なのではあるまいか。

二、「師」としての奇談書とその評価

十返舎一九校・東男子著『〈中古／奇談〉雙葉草』（享和二・一八〇二年正月刊、以下、『雙葉草』と略す）も同様に転倒した不当な評価が与えられてきた作品である。本作は、半紙本五巻五冊、全五話から成る読本作品で、著者「浪華　東男子」（内題下）は、十返舎一九の戯名であり、すなわち一九と同一人物とされる[2]。

横山邦治氏は、『雙葉草』は読本史上、「展回期」に布置されるとした上で、「享和年間という新しい稗史もの読本の定型の確立に向って京伝や馬琴が飛躍的努力をしている時期としては極めて前時代的後向きの奇談もの」であると否定的に評価する[3]。氏の指摘通り、ストーリー展開上も文体の上からも「前時代的」と評されること自体は妥当に思われる。

第一話「羇中怪異」は、浪人の一子岩城東太郎が、隣家の豪富尾西家の一人娘おみよと両想いとなるが、尾西家に婚姻を反対され、やむなく出奔する内容である。家族に反対されたおみよが心を傷めて打ち臥す→夜中その寝室に東太郎が忍びこむ→出奔（堺～東海道の道行文）と、ストーリー展開には何らの新味もない。また、第五話「再偶の奇説」の中盤、鎌倉屋の娘おきぬと武蔵屋の一子との婚姻に嫉妬し狂い死にしたおかるが鬼女に化けて出現する場面は、「此家俄に震動しうそ腥き風おこり、星の如くに並べたる燭臺一度に消ると見へしが、一丈ハかりの鬼女の姿あらハれ出」などと[4]（傍線、浜田。以下、同様）いかにもおさだまりの文体である。実は、このおきぬには互いに恋心を認め合ったたばこ屋の一人息子国蔵があった。彼は、婚姻に加え死亡の一報を聞き、ますます床に臥すばかりであったが、せめて死ぬ前におきぬの墓を一見しておきたいと自分を励ます場面が右の引用部に後続する。その一節も「おきぬか墓所へ尋ねゆくもあわれなりける次第なり」[5]と、まるで古浄瑠璃作品のような古色蒼然とした表現である。このような「前時代的」な要素は、本作のいたるところにちりばめられており、むしろ一九の何らかの作意を読みとるべきであって、「後向き」と評するのは早計である。

本作の作意は、一九が自名とは別に名乗った「浪華　東男子」なる戯名に凝縮している。江戸の上総屋利兵衛・中川新七両書肆から出版された書物でありながら、「東男子の命」により「浪速の好士遼くいにしへをかうかへ述々今奇き物語ともを書綴」った本作品を書肆の依頼で、一九が校合を担った（序）と設定された刊行の経緯に加え、本書の「〈中古／奇談〉」なる角書および『雙葉草』と草の名を書名に掲げたところからも、上方読本の嚆矢たる都賀庭鐘『〈古今／奇談〉英草紙』（寛延二・一七四九年九月刊。以下、『英草紙』と略す）が、念頭に置かれていることはもはや明らかであろう。『英草紙』が意識された箇所は、ほかにもある。『雙葉草』内題下に「浪華　東男子著／東武　十偏舎校」と署名があるのは、『英草紙』目録題下の署名「近路行者　著／千里浪子　正」をもじったのであろう。この『英草紙』の両名の署名が、実在の人物ではなくともに「庭鐘の分身」[6]であったように、『雙葉草』も「浪華　東男子」なる一九の「分身」を立てたわけである。木越治氏は、前田其窓子『〈古今／奇談〉四方義草』（寛政五・一七九三年正月刊）が書名を『英草紙』から借用しつつ、「庭鐘・秋成ら前期読本作家のめざしたところ及び彼らが用いた手法を、彼らに私淑しそれにならったとみなしうる」と定置した[7]。その顰みに倣えば、『雙葉草』もまた、前期読本を「師」と仰いだ作品とみなすことができる。

だとすると、『雙葉草』が凡庸なストーリー構成にとどまっているのも、文体の古色蒼然さも、すべて既存の作品の枠組みを意識的に踏襲した結果であって、「極めて前時代的後向き」であるのは、そこにこそ一九の作意が存するのだから、低評価とするのは甚だ筋違いと言わなければならないだろう。

さて、一九が「師」と仰いだ上方（前期）読本は、飯倉洋一氏

が述べるところの「奇談」の形式（様式）を踏襲したものであった。

「奇談」とは、宝暦四（一七五四）年刊行の『新増書籍目録』にはじめて出現し、次の明和九（一七七二）年刊行の『大増書籍目録』にも継続した分類項目であった。両書籍目録では各々五十七点・七十六点の書物がそれぞれ掲載される（ただし重複するもの五点）。これらの書物は、談義本」・「奇談系読本」（「初期読本」）、「前期滑稽本」、「浮世草子」に該当するジャンルのほか、教訓書・俳諧書・地理書・農業書、遊戯書などを含み、種々雑多な内容群であると概括された上で、「「奇談」の外形的な特徴、および平均的な内実を述べると、次のようである」[8]と、以下八点の特性を掲げる。

①半紙本四冊または五冊の形態。
②青色系の表紙。
③漢字平仮名交じりの本文。
④一冊十数丁から二十丁程度の丁数。
⑤各冊に、一・二図の挿絵。
⑥短編説話の集成という枠組み。
⑦問答・談義・咄などの語りの場の多用。
⑧教訓・啓蒙の意義。[9]

『雙葉草』に適用すると、①は半紙本五巻五冊、③・④・⑤・⑥・⑦・⑧は条件に符合する。[10]②のみ名古屋市蓬左文庫尾崎コレクション所蔵本（請求番号尾-9）は、朽葉色表紙で符合しない（元表紙ではない可能性あり）。[11]したがって、ほとんどの条件を満たしている。

⑦・⑧については、第二話「野干霊妙」を例にとって補足する。冒頭、「語曰積悪の家にハ余殃あり。積善の家には必余慶ありとかや」と『易経』「坤卦」を引用した教訓に占められており、⑧も符合する。『雙葉草』には、『英草紙』の後醍醐帝と万里小路藤房による「逃水」に関する議論（「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」）や、上田秋成『雨月物語』（安永五・一七七六年四月刊）における黄金の精と岡左内が交わした貨幣に関する議論（「貧福論」）のような高度に学術的な議論（飯倉氏が述べるところの「学説寓言」）[12]はないものの、第二話では、狩人の手で父が撃たれ生命の危機だと助けを求めた雌の「野干」に対し、それを信ずるに足らずと反論する岩渕右内とのやり取りに、上方読本の議論体踏襲の痕跡を窺うことはできる。

岩渕更に信用せず。「汝妄言を吐て我を誑んと欲するや。卑き畜獣の身として。何ぞ孝節の儀をしらん。」狐いふ。「君しらずや。畜類固より癡に生て。愛着の念人に倍せり。君疑惑し給ふも去ことながら。実に其事に預るのミ。《後略》」[13]と。

本話は、右引用部のほかにも夢の中で白狐と『素問』を引用して疱瘡を患った右内の息子千松の治療法など、議論を基軸に展開している。よって、『雙葉草』は⑦の要素も踏襲したとみて差し支えなさそうである。[14]何より、全編を怪異譚が占めることからして、『雙葉草』が上方読本の踏襲を作意としたのは明白であろう。

三、書名に「奇談」を有する書物群の分類（案）

明和九年刊行『大増書籍目録』以降、まとまった書籍目録が刊行されなかったため、『英草紙』にせよ『雨月物語』にせよ、先述した「奇談」の外形的・内容的継承は、飯倉氏も述べるように「書籍目録に掲載されていない書物だが、「奇談」に分類されても不思議ではない[15]」と蓋然性の高さに求めるほかはない。とはいえ、上方（前期）読本が踏襲したとおぼしき「奇談」という形式が、さらにいわば「孫」にあたる一九の読本作品にまで継承されたとすれば、それは、同時代の戯作者に広範に「奇談」なる形式（様式）が共有されたがゆえの事象であると解釈する方が自然であろう。

では、書名に「奇談」を有するという基準において、おおむね『大増書籍目録』以降に刊行または成立をみた―版本だけではなく写本を含む―書物群は、内容的にいかなる分類意識を有していたのであろうか。まず、国文学研究資料館ホームページ内の「日本古典籍総合目録データベース」で「奇談」を入力して検索すると、二二一点の書物が抽出される[16]。但し、これらの中には、たとえば、佚斎樗山『英雄軍談』（享保二〇・一七三五年刊）の改題本『奇談戯草』や、『日本小説年表』のみに掲載され現存本が確認されない『百福奇談』等も含まれており、よって、実態が正しく反映された分量とはいえない。加えて、稿者がこれらの書物のすべてに目を通したわけでないので、はなはだ心もとない限りではあって、以下は書名に「奇談」を有する書物の大まかな素描にとどまる。その上で、稿者が瞥見した結果と諸先達の研究成果とを総合的に判断し、おおよそ以下三点の分類項目を提起したい。

①『英草紙』系列の諸作品
②地理案内を含む地方説話集
③巷説を主内容とする実録系写本

この内、①系統の諸作品は、先述した通り、『英草紙』を範とし、［角書「奇談」＋植物名］を書名とする、半紙本四巻ないし五巻で構成される読本作品である。『雙葉草』の例を明示したので、再説を要さないだろうが、さらに挙例すれば、成三樓主人著『奇談環雙紙』（享和三・一八〇三年正月刊）半紙本五巻五冊もまた、上方（前期）読本を「師」と仰いだ作品と位置づけられる。というのも、序文に「又こと国の物語なんとを種として妙に巧て奇に絶たる英草紙繁々夜話等の文どもは数を尽して御文庫に御座共文に花あり心に実あれば[17]」云々と、自作を『英草紙』に連ねているからである。他にも例はあるが、①系統の作品については、紙幅の関係でこの程度にとどめ、②・③を順に概観していくこととしたい。

四、②地理案内を含む地方説話集

②は、［（地域名あるいは地形）＋「奇談」］を書名に有する地方説話集が典型的な型となる。三都（京・大坂・江戸）にとどまらず、周辺の地方を舞台とした奇聞や説話を当該地域の知識人が―

したがって、作者はほとんどの場合無名であり、且つ多作ではない―蒐集する形態を採る。かかる傾向が一八世紀以降に見られるとの指摘は、既に堤邦彦氏にそなわっている。

享保の改革以降、教育と啓蒙の風潮が、一般社会をおおい尽すこととなる。その結果、心学の発生から国学の隆盛に至る百余年の新思潮の渦のなかで、諸国の中核都市に儒学を学び、俳諧・和歌・古典文学をたしなみ、医術・物産の学に通じた地方文人が輩出されていく。これら民間知識層の思想傾向には、人間の肯定、個我の自覚、実証主義的な合理精神、普遍主義への志向といった近代前夜の時代特性が指摘されている。理知を重んじる精神生活の民間浸透は、都市から地方へと確実に地歩を固めていたわけである。《中略》今日、各市町村の誌・史に収められた文献資料の多くが十八世紀以後の成立・書写であることは、郷土史に占める地方文人の重要な役割をものがたるだろう。[18]

右の指摘では、宝暦・明和頃（一七五一～七二）に成立をみたと推定される堀麦水『三州奇談』（写本）を念頭に置いた上で、享保の改革による学問奨励策が、地方文人による地域に根差した情報収集をもたらしたとのアウトラインを描く。学問の拡大と浸透に効を奏した享保改革の文化諸政策による地方にもたらした影響が多大であったのは、異論のないところではあるが、［（地域名あるいは地形）＋「奇談」］を書名に有する地方説話集が版本――『三州奇談』は写本のみが現存――として本格的に出現する契機は、さらに時代が降るのでなかろうか。

というのも、度江山人『北陸奇談』（享和三・一八〇三年正月刊）・鳥翠台北至『〈奇／談〉北国巡杖記』（文化四・一八〇七年四月刊）・堀内元鎧『信濃奇談』（文政一二・一八二九年二月序）等いずれも十九世紀初頭以降に書名［（地域名あるいは地形）＋「奇談」］の出版が集中しているからである。

説話の題材をより広域に求める契機は、橘南谿『東遊記』・『西遊記』（以下、『東西遊記』と表記）の刊行（寛政七～一〇・一七九五～九八年）にあったとおぼしい。南谿は、医学の修行のため、折しも天明大飢饉の渦中にあった天明二（一七八二）年～同六（一七八六）年まで四度の全国行脚を敢行し、草稿としてまとめていた大部な記録を足かけ三年にわたって、全二十巻二十冊の『東遊記（含、続編）』・『西遊記（含、続編）』を出版した。[19] 内容は多岐にわたり、様々な評価が可能であるが、序文を寄せた伴蒿蹊が「危を犯し、嶮を凌[20]」いだ記録と概括したように、人がほとんど足を踏み入れてこなかった辺境の地に素材を求めたところに最大の功績があった。

その典型例として、『西遊記』続編巻之二（寛政一〇・一七九八年六月刊）「五ケ邑」をまずは挙げるべきだろう。現在の熊本県八代市にある五箇村は、平家の落武者たちがコミュニティを築いたとの伝説があったものの、長くヴェールに隠れていたが、おおむね十六世紀後半に住民の存在が初めて確認されたという。

其嶮岨中々いいつくすべきにあらず。更に道とてもなし。夫

ゆえに、平家の人々子孫年々に繁茂して数千、万人に及び、年月は数百年が間一向人間の通路はたえはて居たりしが、足利の末にや、太閤の始にや当りけん、川上より椀の流れ来たれるをふと見付けて、此山奥に住みけりと知りて、ようように尋ね入りて、始めて五ケ村の人、此世に通ぜり。[21]

五箇村は、貞享二（一六八五）年にいったんは幕府直轄領となった後、天草御代官の管理下に置かれた。[22] 本章段を南谿は「日本せましといへども、また人迹通わざる地も辺土にはおおかりぬ」と結ぶが、[23] 彼の関心は辺境の発見に存していたのではなく、幕府直轄に預かるまで塩を摂取出来なかった五箇村の住民が何故命を保てたのか、という医学的な関心に存していた。[24] だが、彼の関心の所在とは無関係に、『東西遊記』は「辺土」に素材を切り拓いた紀行ないし説話集として享受されたのである。

一無散人『〈諸国／奇談〉東遊奇談』（寛政一三・一八〇一年正月刊。以下、『東遊奇談』と略す）半紙本五巻五冊は、『東西遊記』の影響がはっきりみとめられる早い作品である。書名からも明らかではあるが、ほかならぬ南谿が序文を寄せたのが何よりもその証左である。南谿は、序に自作を「おほかたの世にしられさりけるかた山さとのことまてもむらきものこゝろのおよひつるかきりはものしたりし」[25]と総括したうえで、『東遊奇談』を自作の意志を引き継いだ旨を記載する。じっさい、『東遊奇談』には辺境に素材を切り拓いた物語が多くを占めている。一例を挙げると、巻之二「人取藪」は、下総国「八わた」の道端にある「小深き竹藪」であり、一旦入ってしまうと二度とは出られない「あやしき」「魔所」だと紹介する。また、天明の災厄の諸相を克明に記録した先行作に倣い、『東遊奇談』でも天明三（一七八三）年の浅間山噴火後の麓の様子を、「草津まで十里のあいだは、砂諸木をうづんで草木なし。一鳥きこへず。けふり吾うへになびきて時〳〵焔燃、あるひはきえて朧夜をあゆむがごとし」[26]と、おおまかな被災状況の報告に続けて、山の半腹で旅人に茶水をふるまいながら生活を営む親子五人の所帯を、「鳥もかよはぬ山中にとなりもなき孤つ家をおのが栖とし」[27]ていると紹介する（「天狗瀧」）。人間はおろか鳥すらも近づかない辺境の地を歩いた作者の視点を反映したと同時に、南谿の意志を継いだ箇所であるといえよう。

［（地域名あるいは地形）＋「奇談」］を書名に有する後続作品も『東遊奇談』と同様、辺境に素材を求めるようになる。

鳥翠台北堅『〈奇／談〉北国巡杖記』（文化四・一八〇七年四月刊）は、青色系の表紙・半紙本五巻五冊構成の①系列の作品の要件を満たしおり、かつ②の要件をも満たす作品である。冒頭の「菊酒の故実」は、金沢を流れる浅野川の水源にあると伝えられた「白菊の淵」から菊を採取するよう大守に依頼された家臣たちが現場に赴き長櫃に入れて持ち帰ったものの、いざ蓋を開けると白露ばかりが残って菊はなかったという不思議なストーリーである。[28]「常に真人」しか住まないとされる領域に足を踏み入れる本話は、『東西遊記』が辺境を求めた姿勢に通底する。

先に『東遊奇談』の「人取藪」を挙例したが、人の出入りを拒

む――いわゆる「忌み地」の一種だろう――この藪は、先の「白菊の淵」のごとき人里離れた場所にあるのではなかった。このように、②の系列の書物には辺境のみならず、いわば「隠れ名所」を記載する特徴がある。『〈奇／談〉北国巡杖記』でいえば、第二話「槌子坂の怪」や第三話「九人橋の奇事」がこれにあたる。前者は金沢城下小姓町の中ほどにあるなだらかな坂は、一年を通して水が溢れていて、無理に通行しようとすると「真黒」な「搗臼ほどの横槌」が転がり落ち、笑い声をあげ雷のような大音を響かせて消失するという奇聞であり、後者は同じく味噌倉町に「九人橋」なる小さな橋は、不思議なことに一人づつ渡っても支障はないにもかかわらず、十人並んで渡るときまって一人が消失してしまうという奇聞である。ともに、読者が比較的追体験しやすい位置にあるため、「隠れ名所」の紹介としても機能しているといえよう。

木越俊介氏は、『東西遊記』が辺境に材を求めた意義を、以下のように論じている。

かつて辺境の地にあったものや存在すら想定もしなかったようなものが、知の及ぶ範囲が拡大することにより獲得されていく――従来の怪談・奇談にも奇を辺境に求めたり認めたりする姿勢はあったものの、それは周縁的なものとして位置づけ理解（したことに）する点において、いまだ所与の知の境界内に安住しているといえよう。南谿における知はそこにとどまらず、空間的、時間的により開かれたものとしてありつづける。知見が広まれば広まるほど、その先にさらなる未知の領域が待ち構えているわけである。《中略》未知なるものや理の及ばないことが世界にはいまだ多く存在し、その深淵をわずかでも垣間見、聞いたり触れたりできることの幸運や喜び、そして驚き。こうした畏敬と驚喜の往還によってもたらされるのが『東西遊記』の奇なのである。[29]

辺境を求める南谿の旅は、堤邦彦氏の指摘にもあったように十八世紀以降の学問奨励に遡及される長い歴史的背景に裏付けられるであろうし、さらに木越氏の指摘する知的活動の連鎖的拡大反応と把捉しうるであろう。ややポエティックな言い方で付け加えるならば、「奇談」という書名が、説話あるいは地理案内を辺境にまで求める原動力となったと考えられるのである。さらには、あまり目につかなかった「隠れ名所」にも目を配る原動力ともなった。

夾撞散人『〈奇／談〉諸国便覧』（享和二・一八〇二年正月刊）半紙本五巻五冊も書名こそ①系列に近いが、②の要件を満たす作品である。説話集としても読めるが、地理案内の要素も含まれている。案内されるのは、多賀神社や離宮八幡宮等の寺社、淀川・宇治川といった名所であり、目新しさはない。ただ、『名所図会』の類では紹介されない逸話を紹介する意図がみとめられる。一例を挙げると、「摂州芥川のほとりに八町縄手とて長き松原あり。いにしへより雨夜には火出る。是を小女郎火といふ」[30]（巻之五「小女郎火」）などとよく知られた名所芥川にまつわる逸話が紹介される。先の「槌子坂」と同じく、読者が容易に追体験しうる内容が

披露されているといえそうである。

板坂耀子氏に『東西遊記』が「一応紀行文として扱われることが多い。しかし、近世にはいわゆる奇談集ともいうべき作品類が、他にも数多く存しており、それらと紀行文の区別は案外つけにくい」との指摘がそなわる。[31] 紀行文と奇談との境界線を曖昧にしたのは、辺境を求めた橘南谿の旅によってもたらされた作用と換言出来よう。

華誘居士『遠山奇談』前編（寛政一〇・一七九八年四月刊）は、天明八（一七八八）年正月晦日未明より京都市中をほぼ全焼したいわゆる「天明の大火」で類焼した東本願寺の御殿を再建するため、柱となる木材を求めて遠山に分け入る内容である。はたして、辺境に足を踏み入れたために起こった様々な怪異が綴られるとともに、紀行文としての性格もあわせ持つ作品である。それは、本文冒頭に「此遠山紀行をくわしく聞に稀なることなれば聞ながすことをおしみて、筆をとり其はじめ終りをもとめしる」（第一章「発端」）したとあることからも明らかで、[32] 先に板坂氏が述べた「紀行文との区別」がつきづらい「奇談集」の好例と言える。

『東西遊記』との類似性は、たとえば第五章「ぼたん山京丸の里の事」に、

此里人のいふには「此さとは昔より知るひとなかりしが、享保のころ洪水（おほみず）ありし時、此宮川へ調度など流れくるをあやしみ、此奥に人家（ひとざと）あることをさとし、おほやけにつぐるに、其あたりの武官に課（お）せてこれをただしぬ」となり。其時河すぢをつたひ尋られしに家居（いへゐ）五六軒あり、男女五十余住めり。[33]

などとある箇所に先に示した『西遊記』「五ケ邑」を想起するのはたやすいだろう。このほか、「大キさ猪ほとありて惣身真白（まつしろ）、惣毛の長さ二尺余、狸のかほによく似た」、「全く怪獣」[34]としか表現しようのない異形のものに遭遇する梶谷山（第十三章）は、人を寄せ付けない辺境と呼ぶにふさわしい。

さらに時期がくだって、度江山人『北陸奇談』（享和三・一八〇三年正月刊）半紙本四巻四冊は、[（地域名あるいは地形）＋「奇談」]を書名に持つ典型的な②の系列の説話作品で、越中国にある「砺波山（とぬみ）は源平の古戦場（こせんじやう）にして、阻（けは）しき山にて平生人の往（ゆく）ことまれなり。曇りたる日或は雨天なとにはかならず幽霊出て人をなやますことあり」[35]（巻之二「古戦場の怪異」）と作中にある通り、辺境に材を求めた南谿に由来する説話作品ではある。なにゆえ、含みを持たせた言い方をしたかというと、本書の成立経緯は、いわくつきであるからである。実は本書は、勢州山人『〈諸国／奇談〉北遊記』（寛政九・一七九七年正月刊）[36]の改題改竄本なのだ。

詳細は別稿に譲りたいが、「丙子（宝暦六・一七五六年にあたるが、内容からみて疑わしい。――注、浜田）孟春睦潭主人」による一丁分の序文を全て削除の上、「享和紀元晩夏　閑齋主人誌」による一丁分の序文に差し替え、内題下の作者名「勢州山人」を削除の上、「度江山人著」を代わりに埋木し、本文には手を加えず章題のみを削除し差し替え、挿絵も改刻した―その関係で丁付けに

も変更が加わる――類版を疑われてもおかしくはない措置により本書は成立をみている。[37] このような複雑な経緯を辿った理由は明らかではないが、『東西遊記』の継承作たる明白な書名をとりやめてまでも、外題角書にあった「奇談」を本題にスライドさせたのは、［（地域名あるいは地形）＋「奇談」］こそが辺境を求めた南谿以降の説話作品のスタンダードとなったからこその措置ではなかったか。改題の事由についてはさておくとして、内容に話題を移そう。

『北陸奇談』（『〈諸国／奇談〉北遊記』）は、書名通り佐渡・越後・越中・加賀の北陸地域を舞台とした説話を十七話収めた作品である。さりながら、実際に設定された地域に生じた出来事を収めたかといえば、一定の注意も要する。巻之三に「奇草食傷を治す」という一話がある。あるいは、『北遊記』原題の「蛇含草」の方が落語の演題としても現在の読者には馴染みがあるかもしれない。但し、愚かな男が餅の食べ過ぎで満腹となり、蛇含草を口に含んで苦しみから逃れようとしたところ、餅に身体を乗っ取られてしまう落語とは、ストーリーが異なる。蛇含草を入手した羽咋の七郎右衛門が名医となった所以が語られる。

其辺りの人のいへる、七郎右衛門若き時、玉子問屋なりしが、夏の頃になれは、夜々卵を盗むものあり。七郎右衛門さま〳〵気を付けるに、或夜三尺はかりの蛇梁（うつはり）の上より来て、卵の箱をおしわけ十四五ばかり呑て帰りけり。七郎右衛門怒て、明日木を削（けつ）りて卵の如にし、三四十ばかり卵箱の上に入置。さて夜に入て、如何するぞと伺ひ見けるに、果して蛇又来て呑こと前夜の如し。如何するぞとみるに、外へ出て石垣の内へ入んとして、木の卵消ざれば身をもみけるが、それより庭の内を這まはり、何やら求める体（てい）なり。程なく一本の草に尋ねあたり、これを喰へて彼卵の所をなでねぶり、終（つる）に其草を呑たりしが、忽木の卵消て、平生の腹の如く細り、石垣へ入りける。七郎右衛門あやしくおもひ、彼草をとりおきて食傷なとしたる人の胃のあたりを撫（なつ）るに立所（たちところ）に効あり。夫より万の病を療（りうち）するに手に従て療（いへ）ずといふことなしとぞ。彼草は蛇含草（だがんさう）といふよし。[38]

卵を盗む蛇に一泡吹かせてやろうと木製の卵を飲ませると蛇が苦しみ、蛇含草を口に含むと蛇が回復したのを目撃した主人公が薬用とするストーリーは、袁枚『子不語』巻二十一「蛇含草消木化金」と一致する。[39] よって、「奇草食傷を治す」（「蛇含草」）は、「蛇含草消木化金」における張文敏の行為を七郎右衛門なる人物に適用した操作がみとめられ、羽咋で実際に起こった出来事や伝説を記録したとは早計に判断できない。

かかる出典を操作した説話の事例はこれ以外にも見当たるかもしれない。ともあれ、②系列の説話には、必ずしも現地に由来すると限ったわけではないことには留意しなければならないだろう。

先述した通り、②系列の作品には全国的には無名ではあっても、地方の文人が作者として関与していることと、右のような事例は無関係ではない。たとえば、『信濃奇談』（文政一二・一八二九年春序）大本二巻二冊の著者堀内元鎧は、高遠藩の儒学者阪本天山

以来の学統につらなる儒学者であり医者である。[40] 本書巻上「蛇足」は、小町谷に夜半になると鶏を巻きとろうとする蛇が出現するため、主が串に刺して焼くと足が出てきたというストーリーであるが、元鎧はこの物語の後に次のような考証を置く。

陶隠居か『本艸注』に「蛇皆足あり。地を焼て熱せしめ、酒もて汚ひてその中に置は、足出つ」と見えたり。また、『酉陽雑俎』にも「蛇は桑柴もて焼は、足出つ」と見えたり。蛇の足出るは、常の事ならんに、古より蛇は足なきものと人々思へるなり。『戦国策』に、蛇をつくりて、足を画を無用のたとへとなし、東方朔か守宮を射てこれを蛇とすれは、足ありといひしの類、皆蛇には足なきものとなせしなり。[41]

傍線部分は、書名を明かしていないものの、明張鼎思編・陳性學等『瑯琊大醉編』巻之三十九「蛇足」の

見三戰國策ト與ニ二史記楚ノ世家及ヒ陳軫カ傳ニ莊子ニ以テ爲ニ脊脇ノ而行方朔射テ二守宮ヲ一曰ク謂テレ之ヲ爲ハレ蛇ト又有リレ足以ナリレ言ヲ二蛇ニ無キヲレ足也按ニ本草蝮蛇陶隱居カ注ニ云ク蛇皆有リレ足焼テレ地ヲ令レ熱セ以レ酒ヲ沃テ之ニ置ハレ中ニ足ノ出ツ酉陽雜俎ニ云蛇以ニ桑柴ヲ一焼ハレ之ヲ則見ルレ足ノ出ツヲ[42]

との文言に一致している。「蛇足」の場合も、そもそも蛇から足が出たと伝える小町谷のエピソード自体が、『瑯琊大醉編』に拠った可能性を示唆する。文人・知識人が携わったゆえと言えそうである。

②系列の説話集は、読本と並行するかたちでさらに岡田玉山作・画『絵本妖怪奇談』（無刊記）半紙本五巻五冊のような絵本読本へと展開していくこととなる。

五、③巷説を主内容とする実録系写本

ここまではもっぱら版本を取り扱ってきたが、他方で写本にも「奇談」を書名に有する作品がある。印刷に付さなかったのは、身分の貴賤にかかわらず時に醜聞に属するような事柄ですら、実名はおろか住所まで明かされるエピソードが占めるからである。裏を返せば、実名を隠さずにおいたのは、そのエピソードの信憑性を担保するためには必須の措置となるからでもある。

③に分類される書物群は、現在通行した近世文芸のジャンルでは、「実録」にあてはまる。お家騒動や武士の敵討を扱った実録作品は、近年翻刻紹介や研究が進んでいるが、③はお家騒動なり敵討ちといった、一連のまとまったストーリーを有する長編作品ではなく、真偽のほどはともかくとして貴顕から町人まで様々な社会階層にある人物が関与した短編の巷説を寄せ集めて構成された作品を指す。②になぞらえるなら、③もまた書名「奇談」が巷説にまで話材を拡張した原動力として機能していると考えられる。さりながら、昨今研究が盛んになり、実態の解明が進む前者に比べ、後者は一部を除けばまったく着手されていない領域で、ほぼ未開拓といってよい。よって、本稿に担えるのはごく僅かな素描にとどまることをあらかじめお断りしておきたい。

中京大学図書館に所蔵される『古新奇談』半紙本三巻三冊は、貳

篇第六・第八・第拾壱の三編のみの零本で、他には伝本を見ない。実は、本書は『宝暦雑録』改題本で、全話既に『上方藝文叢刊』に翻刻紹介されている話材と同内容（全二十四話）で構成されている。新規の章段はないものの、写本が比較的多く伝来している『宝暦雑録』にあっては、唯一知られる改題本である。

『宝暦雑録』は、書名の通り、宝暦年間（一七五一・六四）に幕閣から町人に至るまで様々な人々がかかわった種々の事件、大坂を中心とした市井の出来事を寄せ集めた写本巷談集である。『古新奇談』に採用された巷説にしぼれば、越後国水原の代官の子息が身持放埒であったために、飢餓に悩まされた民百姓を助命するためのせっかくの「救米（すくひまい）」を遣い込んだために流罪に及んだ一件（「北国民御救米御仁愛之事」貳篇第拾壱）などといった内容でさえ実名を憚っておらず、享保の出版条例を持ち出すまでもなく、版本での刊行はかなわなかった。[43]

先述の通り、『古新奇談』には、新規の話材は見当たらないものの、『宝暦雑録』諸本以上に権力者を苛烈に批判した一節がある。「摂州黒川村乞食騒動之事」（貳篇第六）は、『宝暦雑録』「摂州黒川村非人共狼藉の事」と同内容であるが、困窮した乞食の反乱を収拾しえなかった細井安藝守・桜井丹後守の二名の大坂町奉行を「愚鈍之両奉行」、「御両人共愚昧の生質」[44]と指弾したのは、『古新奇談』に独自にみられる本文である。このように代官を名指しで口を極めて批難する内容は、写本なればこそなせる業といえる。

一気散人序『百生一奇談』も、文政六（一八二三）年四月より大旱魃に見舞われた紀州地方の百姓が庄屋に対し、生存権をかけて大規模な一揆を起こした騒動の記録である。[45]上の巻「亀池掛り一揆之事附り紀三井寺村周章の事」には、五月二十八日に「惣勢弐千人余」が一揆を起こしたとし、詳細を以下のように伝える。

（庄屋・小野田―注、浜田）重次郎方は前々より歴々の御屋敷へ御出入なれは、御屋敷より百人計り御加勢にて、所々に鉄炮相構へ、今や遅しと待ともしらす、大鞁法螺貝を吹立て、酒堤伝ひに押来るを穀もよしと横合より待設たる鉄炮を筒先揃へ打立れは、一揆の惣勢肝を消し、打殺されては叶はぬと酒の中へ飛込て、跡をも見すして逃たるは心地よかりし形勢也。[46]

庄屋と百姓が正面から戦闘状態に陥り、この後庄屋は打ち砕かれてしまうが、「若山より御役人天野孫助殿御出張遊され、事なく静謐にこそ治」る。本作品では先の細井安藝守・桜井丹後守のごとく代官が騒動の鎮静に失敗せず、いずれも代官の介入が成功して結末を迎える。[47]『古新奇談』に見られる権力者への指弾はみられないものの、庄屋が領民に銃を向けた経緯は、到底版本で公開できる内容ではない。また、本作品の書名は、その内容からして本来「一揆談」とすべきだったのであろうが、地方の騒動の記録として「奇談」がふさわしいと判断したのか、この書名を有する諸本も実在しているため、本稿では③系列の写本と認定したい。

「[年号]＋奇談」を書名に有した写本は、[年号]の当該時期に生じた種々の出来事を収めた作品と察しがつきやすい。

『寛延奇談』六巻六冊は、寛保二（一七四二）年～延享四（一七

四七）年の六年間にかけての主に武士階級が関与した出来事を中心に綴った写本である。本作品の内容については、西田耕三氏による紹介[48]がそなわるので、そちらに譲りたいが、仙台家中の鑓持松原新左衛門が一休和尚正筆の「書物」を入手し、九百両の高値で売却されたとの記事（巻之二「仙台家中鑓持不計一休の正筆調候事附紫野大徳寺添簡之事」）、寛保四（一七四四）年二月五日に出現した車輪のような形状の星に関して、陰陽師安部恭邦の「勘文」と『和漢合運』を用いた考証を加えた記事（巻之一「寛保四年二月出現星之事」）がある等バラエティーに富んだ内容である。

そして、『古新奇談』と同様に、醜聞も含まれる。巻之一「西本願寺隠居之事」では、西本願寺第十六代宗主であった堪如（本文では、「たんにやう上人」）の実弟「しやうにやう上人」の素行が悪く隠居の沙汰となった理由を事細かに記している。その中にはたとえば、

一祇園町宮川町筋之白人を大勢呼ひ、裸ニ致し泉水へ追入、難義を興し悪口申、女殺害又裸ニて追放シニなり候よし[49]

などかなり際どいエピソードも含まれるが、こうした実名入りの雑多な記事こそが、③の実録系写本の典型例である。

『〈御影参／難波語〉辛卯奇譚』一巻一冊は、明和八（一七七一）年四月中旬以降、難波の各町で生じた大規模な「御蔭参り」の記録である。明和の「御蔭参り」の記録としては、本居大平『おかげまうでの日記』・度会重全『明和続神異記』が知られるが[50]、本書もその一つである。したがって、本章でこれまでに紹介した実録系写本とは異なり、種々の話材が収められているわけではなく、明和の「御蔭参り」の記録のみを内容とする。難波各町での参宮への対応や参加人数などが事細かに記された歴史史料としての性格が強いが、「今日も明日もと世上甚たさはかしき事共也かゝる事なれは盗難の気遣なしとて戸引たる儘にて大坂過半老若男女児童出行けり[51]」などと、不用心にも構わぬほどの狂騒を伝えており、「御蔭参り」の実態を把捉しうる資料としても読まれるべき写本である。

やや書名の付け方が安易な『珍説奇談』五巻五冊は、土井大炊頭利勝や柳生十兵衛といった有名どころの武士を中心に全三十三話の逸話により構成されている。巻之壱に「小野のお通が事」を収めるが、よく知られた真田伊豆守正之との関係は、お通とではなくその娘が密通の相手だとの話を伝える。

大猷院様御上洛の折から、真田伊豆守ト彼むすめ密通して、懐胎して伊豆守難義せしニ、お通詮議して誰子なるぞと有ければ、有の儘にかたりしとそ。以の外腹立、上へ申上、領知被召放と聞ぬ[52]。

その後、お通の娘は男子を産み、母とともに江戸下谷広小路で暮らし、伊豆守死後「三代目蔵人伊豆守養子ニ成て、今の伊豆守也」などと伝える。『珍説奇談』も、嘘とも誠ともしれない巷説を蒐集した③系列の好例といえようか。

書名に「奇談」を含む写本類は、じっさいはかなり広範囲な領域をカバーしている。たとえば、『寺院奇談』は、三河国内の寺院

の由来を主な内容としており、巷説の類はほとんど見当たらない。奥付によると、文政七（一八二四）年夏に「藤忠尭」なる人物により書写されたとあり、書写年代を起点に由来を遡る年代記風の形式で記録されている。一例を示そう。

●長壽尼寺禅臨済西ノ町實相寺末足利義氏室頼朝卿息女法名本成大姉ノ菩提所ナリ

私曰絶食ノ尼近頃住持也　文政七是ヨリ四五六十年以前也[53]

「私曰」以下に伝える「絶食ノ尼」とは、橘南谿『東遊記』巻之五末「不食病」等に登場する尼のことである。南谿が百井塘雨から聞き伝えたところでは、その尼は二十年来食事をとっていないにもかかわらず、とりたてて身体に異常をきたしていない、香川修徳が名付けたところの「不食病」の患者であるという[54]。かように、巷説を採用した箇所もあるが、多くは寺院の由来にとどまっている。

最後に、災害の詳細な記録に「奇談」と書名を付けた例に言及しておきたい。

『古新奇談』（『宝暦雑録』）に宝暦一〇（一七六〇）年二月六日に江戸浜松町の料理茶屋久國屋から出火した克明な記録を「江戸大火之事」（貳篇第八）に残した例に顕著であるが、災異が及んだ範囲やその詳細な具体相を書き残す営為は、後世に生きる人のためにも大きな役割を果たす。災厄は、およそ日常とかけ離れた状況を生み出し、人間を不安に陥れることが、この種の記録の書名に「奇談」と付けるゆえんなのであろう。この種の書物は写本と版本が相交るが、歴史記録の性格が濃厚なため、③系列に分類しておきたい。

『大地震津波乃奇談』は、嘉永七（一八五四）一一月四日午前と翌五日夕刻に東海沖で発生した大地震と津波の大坂市中の詳細な記録を二巻二冊の版本としたものである。天王寺や道頓堀の芝居小屋等の市中の建造物の被害状況を詳細に報告し、津波で多くの怪我人と破却した川船があったことを受けて、「是、治世に乱を忘るゝこと勿れといふ誡めを忘却して、無事の時に変事を覚悟せざるより斯る事とはなりぬ[55]」との教訓を附した上で、一旦大地震が発生した後で、余震を恐れて家を出て船に逃れたがために津波に襲われて多数の犠牲者を出してしまった前例は宝永四（一七〇七）年十月の地震にあったのに、その経験が生かされなかったことを痛恨とする一節があるが、ただし、本書は深刻なトーンで貫かれているわけではない。津波の前に二丈余りの海坊主が出現した（巻一「高坊主の話」）といった真偽の疑わしい前兆現象も記録している。さらには、新田の百姓の下男八助が、地震で二階から転げ落ちて気絶したが、半分覚醒した時に津波に浸かってしまったために自分が八寒地獄に堕ちたものと勘違いし、挙句には八助を心配して家に戻ってきた二名を鬼と見誤って、蒲団から出てこなかったというおかしみのあるエピソードもあわせて掲載している。硬軟や真偽を織り交ぜて、災異の多様な側面を描き出すことに成功した一書といえよう。

おわりに、

本稿では、大規模な書籍目録が出版されなくなって以降の、「奇談」の行方を書名「奇談」を基準に、素描を試みた。もっとも、飯倉洋一氏が、書籍目録の分類項目の「奇談」に掲載された書物という明確な基準に従って網羅的に調査された[56]のとは違い、融通無碍でもある書名としての「奇談」を調査基準とするのは、そもそも問題含みの試みであったのかもしれない。浮世草子作品によく見られる「風流」という書名―周知のとおり、書籍目録では「風流読本」なる分類項目がある―にしても、書名自体が書物の性格や形態を規定するとは言い難い。いわんや、「奇談」においても同様であろう。

他方で、「奇談」は文字通り、「珍しくて、ふしぎな話。珍しく興味のある話」（『日本国語大辞典』）という意味を持つ語彙であるが、なればこそ、ありふれた常識や日常にとどまらない領域に話材を求めようとする原動力を有した書名であるという本稿の見立ては必ずしも的外れではなかったように思われる。

とりわけ、怪談（怪異譚）に注目が集まりがちな近世説話にあっては、辺境探訪や「隠れ名所」の発見・発掘といったモチーフは見逃されがちである。その意味で、②系列の書物のさらなる探求は、近世説話の豊饒な世界を浮かび上がらせることが出来るだろう。また、③系列の書物の主とする短編実録集に注目する必要性は、本稿の作成過程で痛感したことのひとつである。

もとより、課題は山積しているし、書き漏らした書物も少なくはない。さりながら、飯倉氏が構想されたように、「「奇談」という領域を構想する必要」により、「近世における仮名読物史のターニングポイントが見えてくるからである[57]」のであるとすると、本稿のささやかな試みがその一助となれば幸甚である。

注

（1）『日本古典文学大辞典』第四巻（一九八四年、岩波書店）

（2）中山尚夫「〈中古／奇談〉雙葉草」の書誌」（『古典文庫』第五六九冊　一九九四年、古典文庫）

（3）第三章「終結期の読本――天保年間から幕末まで――」第二節「中本ものの諸相」（横山邦治『読本の研究――江戸と上方と――』一九七四年、風間書房）

（4）引用は、（2）同書に拠る。適宜、句読点を補った。一九作・貞之画『〈大道具／幕なし〉怪談宝初夢』（享和三・一八〇三年正月刊）にも「御勅使の御入りイーー「てれつく〳〵、すつてん〳〵」と囃し立て、、生〳〵ざき風が吹く〳〵と、座敷〳〵の燭台一時に消へて、真つ暗がりとな」ったと、同様の定型文が見られる（引用は、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本に拠る。適宜、平仮名を漢字表記に改めた。請求番号25-66-23）。

（5）引用は、（2）同書に拠る。

（6）中村幸彦校注・訳『新編　日本古典文学全集』50（一九九五年、小学館）『英草紙』頭注十九（二十一頁）。

（7）木越治「「師」としての前期読本――『四方義草』を視座にして――」（『日本文学』第66巻第10号　二〇一七年一〇月）及び、木越俊介「（『四方義草』）解説」（『江戸怪談文芸名作選』第五巻　諸国奇談集　所収。二〇一九年、国書刊行会）参照。

(8) 飯倉洋一「テクストの生成と変容―近世における「奇談」の場合――」(広域文化表現論講座「テクストの生成と変容」プロジェクト　第一回研究会二〇〇五・五・一九　配布資料)参照。
(9) 飯倉洋一「近世文学の一領域としての「奇談」」(『日本文学』第61巻第10号、二〇一二年十月)
(10) 蓬左文庫尾崎コレクション本(請求番号尾‐9)の五巻は、最少十～最大十五丁で構成されており、④に符合する。
(11) (2)前掲中山尚夫「『〈中古／奇談〉雙葉草』の書誌」によれば、替表紙で「本来は、五冊共に茶色無地表紙」であったと指摘されるが、早稲田大学図書館蔵本(請求番号へ13‐03‐107)は、原題簽貼布で五冊とも縹色表紙である。
(12) 飯倉洋一「大江文披と源氏物語秘伝――〈学説寓言〉としての『怪談とのゐ袋』冒頭話」(『語文』第84・85輯　二〇〇六年二月)参照。この他、上方(前期)読本作品中に高度に学術的な議論が交わされた事例を分析した論考に、同氏「上方の「奇談」書と寓言――『垣根草』第四話に即して――」(『上方文藝研究』第1号　二〇〇四年五月)、「王昭君詩と大石良雄――『新斎夜語』第一話の「名利」説をめぐって――」(『語文』第百五輯　二〇一五年一二月)、木越俊介「『新斎夜語』第八話「嵯峨の隠士三光院殿を詰る」と『源氏物語』註釈　江戸中期における源氏受容の一端」(鈴木健一他編『江戸の学問と文藝世界』二〇一八年、森話社所収)がある。
(13) 引用は、(2)同書に拠る。読みやすさの便を図り、引用符を補った。
(14) 『雙葉草』第一話「羇中怪異」の主人公岩城東太郎が堺を住まいとしながら「天性美麗にして」、「詩歌の才、又絶倫」なのは、『雨月物語』「蛇性の淫」の豊雄が紀伊国三輪を住まいとしながら、「常に都風たる事をのみ好」んだのに着想を得た人物造型であったか。
(15) (9)同論。
(16) 二〇二一年一一月二五日現在。
(17) 引用は、国立国会図書館蔵本(請求番号201‐128)に拠る。ただし、表紙は青色系統ではなく緑色系統。
(18) 堤邦彦「続・怪談との共棲――『三州奇談』と地方文化の一断面――」(『江戸の怪異譚』二〇〇四年、ぺりかん社)
(19) 宗政五十緒「橘南谿『東西遊記』の写本と刊本」(『日本近世文苑の研究』一九七七年、未来社)参照。
(20) 引用は、宗政五十緒編『東西遊記』1(一九七四、平凡社)に拠る。
(21) 引用は、宗政五十緒編『東西遊記』2(一九七四、平凡社)に拠る。
(22) 「柿迫村」(『八代郡史』一九八六年、臨川書店)参照。
(23) 引用は、(21)同書に拠る。
(24) 南谿は、『黄華堂医話』に「此地右のごとく五六百年このかた塩を断ジといへども、人民皆長寿壮健にて今も百歳に過る者少からず」と記している(引用は、『続日本随筆大成』10　一九八〇年、吉川弘文館に拠る)。
(25) 引用は、山本和明「一無散人『〈諸国／奇談〉東遊奇談』――翻刻と解説――」(『相愛女子短期大学研究論集』42　一九九五年三月)に拠る。
(26) 引用は、(25)に拠る。適宜、濁点と句読点を補った。
(27) 引用は、(25)に拠る。
(28) 引用は、『日本随筆大成』新装版〈第二期〉18(一九九五年、吉川弘文館)に拠る。
(29) 木越俊介「寛政・享和期における知と奇の位相――諸国奇談と戯作の虚実――」(『日本文学研究ジャーナル』第7号　二〇一八年九月)
(30) 引用は、お茶の水女子大学図書館蔵本(請求番号913・5‐Ki46

-36A）に拠る。近世の地誌を「文学作品」として捉え返そうとする論は真島望氏の一連の論考に詳しい。とりわけ同氏「諸国説話集『諸国里人談』・『本朝俗諺志』と地誌――地誌作者菊岡沾凉の研究（四）――」（『近世の地誌と文芸――書誌、原拠、作者――』二〇二一年、汲古書院所収）で示されたごとき近世説話集と地誌との近接・交流の諸相については、今後さらなる広範な検証が必要となるだろう。

（31）板坂耀子「奇談の世界」（『江戸を歩く――近世紀行文の世界』一九九三年、葦書房）

（32）引用は、九州大学附属図書館蔵本（請求番号読本Ⅶ-寛10-カ-1）に拠る。また、向山雅重校注『日本庶民生活史料集成』第十六巻（一九七〇年、三一書房）所収の翻刻も参照した。

（33）引用は、（32）同書に拠る。

（34）引用は、（32）同書に拠る。

（35）引用は、国立国会図書館蔵本（請求番号　201・4-To415h）に拠る。

（36）蓬左文庫尾崎久弥旧蔵本（請求番号尾9-1）は、寛政九年版本と同板であるが、刊記を「寛政十一己未正月」と改刻し、九年版の「江戸書林　橋本忠蔵」から「江戸」の二字を削除した後印本である。

（37）『北陸奇談』は、京西村吉兵衛・長村太助・大坂林源七相合版である。本書はさらに、「天保辛丑春三月／黒谷沙門心阿巨道／玄田邊憲書」の一丁分の序文と広告を加えた相合版（江戸須原屋茂兵衛等三書肆・大坂五書肆・京丁子屋源次郎）の後印本も存する。

（38）引用は、（35）同書に拠り、適宜句読点を補った。

（39）岡田充博「落語「蛇含草」をめぐって」（『横浜国大国文研究』35二〇一七年三月）参照。

（40）浅川清栄「武士層の学芸と藩校」（『長野県史』通史編第六巻　一九八九年、長野県史刊行会所収）および、向山雅重「信濃奇談　解題」（（32）前掲同書所収）参照。

（41）引用は、国文学研究資料館蔵本（請求番号ヤ6-171-1）に拠る。また、（32）同書所収の翻刻も参照した。

（42）引用は、『和刻本漢籍随筆集』第七集（一九七三年、汲古書院）に拠る。

（43）多治比郁夫「大阪の巷談集」（『京阪文藝史料』第二巻　二〇〇五年、青裳堂書店）参照。『古新奇談』については、拙稿「《翻刻・紹介》『古新奇談』貳篇第六・第八・第拾壱――『宝暦雑録』改題本」（『京都語文』第29号　二〇二一年一一月）に、『古新奇談』の全冊を翻刻紹介した。あわせて御参看を乞う。

（44）引用は、（43）拙稿に拠る。

（45）關山直太郎「文政六年の紀州百姓一揆――新史料「蒼生一奇談」及「百姓一揆談」について――」（『（和歌山大学）経済理論』第10号　一九五二年一〇月）参照。

（46）引用は、和歌山県立文書館堀家文書蔵本（請求番号ス-54）に拠る。和歌山大学図書館紀州藩文庫所蔵本『百姓一揆談』（請求番号090-13）を翻印紹介した「和歌山大学図書館　地域史料デジタルアーカイブ」を参照し、適宜句読点を補った。（https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/3071055100/3071055100200010/ht000030）

（47）きまって結末が大団円を迎えるのは、序文の「児童に残し、勧善懲悪の一助ともならんかし」との方針を立てたことに拠るものであろう。

（48）西田耕三「歴史の断片――永青文庫蔵雑記類より」（『怪異の入口　近世説話雑記』二〇一三年、森話社）参照。

（49）引用は、熊本大学附属図書館細川家北岡文庫（永青文庫）所蔵本（請求番号　224）に拠る。適宜、句読点を補った。

(50) 藤谷俊雄『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』(一九六八年、岩波書店)参照。
(51) 引用は、西尾市岩瀬文庫蔵本(請求番号8833・48・2)に拠る。
(52) 引用は、黒川村立公民館所蔵本(請求番号 310・20・5)に拠り、適宜、句読点を補った。
(53) 引用は、西尾市岩瀬文庫蔵本(請求番号308・3)に拠る。
(54) 南谿『黄華堂医話』にも、長寿寺の尼のほか、山城国横大路の医者奥田太門と越前国粟田郡の十七八歳の農家の娘の症例も掲載する。
(55) 引用は、名古屋市蓬左文庫尾崎久弥旧蔵本(請求番号 尾5・32)に拠り、適宜、句読点を補った。
(56) 飯倉氏の「奇談」研究については、それが江戸時代の書籍目録の分類項目に端を発するものであるがゆえに、延広真治氏が「江戸に即して江戸を見る、お手本だと思」(延広真治・長島弘明「[対談]近世小説――ジャンル意識を超えて」(『国文学解釈と教材の研究』第50巻第6号 二〇〇五年六月)うと、肯定的な評価に迎えられる一方で、長島弘明氏に「本を売るときに便宜的に付けた分類の名称なんだから、その限定をつけないといけない」(木越治・稲田篤信・飯倉洋一・長島弘明「《座談会》上田秋成」(『文学』第10巻第1号 二〇〇九年一・二月)と、否定的な評価も受けている。
(57) (9) 同論考。

(はまだ・やすひこ 佛教大学)